

2010

2 武士道

日本思想の解明

BUSHIDO:

The Soul of Japan

新渡戸稻造著
矢内原忠雄訳
李 登輝解題二三産業 TEL 06(6944)1231
FAX 06(6944)1232

第八章 名誉

Honour

レンゲン
 <廉恥心>は少年の教育において最も重要な最初の徳の一つであった。「笑われる」と「体面を汚す」「恥じかしくない」と等は、またもやれる少年に対する正しき行動を促すための最後の教訓であった。少年の名誉心に訴える=木、あたかも彼が母胎の中から名譽を持つ養われたかの如く、彼の心地の最も敏感なる處に触れたのである。

シユウタ
 羞恥心の感覚は人類の道徳的自觉の最も早く発達すると私は思う。「禁物の樹の果」を味いし結果、人類に下りし最初の最悪の罰は、私の考えでは、子生む苦しみではなく、荊棘バラやトゲの痛さもなく、羞恥心の感覚の自觉であった。最初の母(イブ)が驕り胸震ふ指も、憂いに沈める夫の摘叶とうる故葉の座花果バジックの葉の上に、粗末なる金針を運ぶ光景にまで悲しき歴史上の出来事はない。この不純の最初の果は、他に及ぶ物をもたらさず、吾人に固定している。人類のあらゆる裁縫的行い、吾人の羞恥心惑工有効に蔽うに足るエピソードを發揮する所である。>

<新井白石(1657-1725江戸中期の朱子学者政治家)がその少年時代において、軽微なる屈辱による品性の妥協を拒絶、「不名譽は樹の切り傷の如く、時はこれを消せず、かえりて大ならむれば叶々と云つたのは正哉である。カーライル(1795~1881イギリスの評論家歴史家)が「恥じはずの徳、喜び同様らしく善き道徳の土壤である」と云つたことは、孟子が教えた、「羞惡惄懃の如くは義の端ハジメ也」。>

<ある町人が一人の武士の指に墨を落すといひ好意をもつて注意したところ、立ちどまらずに真二つに車られたといひ言ふのである。けだし墨は畜生にたがふるものから、貴き武士を畜生と同一視するのは、許すべからざる侮辱であるといひ簡単な奇怪の理由によるのであるが、かかる言葉は、あまりにも重複を厭へて信じ難い。しかし、かかる話の流布したことには、三つの意味が含まれていた。
 (1) 平民を愚鈍せしむに作られたこと。
 (2) 武士の名誉の身分にしつこい過度があつたこと。おらばに
 (3) 武士の間に極めて強い廉恥心が發達していたこと。これである。>

<寛大忍耐に忍の崇高を高めよと
 達した者は、事実甚だ少殺であつた。何れ名譽を構成するに際しては、何と明瞭の一貫的なる教訓を述べられてゐることは頗る遺憾である。たゞ少殺の知徳をもつて人々せざれば、名譽は「境遇より生じたのではなく」各人を喜ぶものであるにあることを知つた。>

<繊細なる名譽の掻の隙、やすき病的なる行を過ぎる。寛大おほむ忍耐の教訓によつて強く相殺された。些細な刺戟によつて立腹するは「短気」といゝ嘲られた。徳音リヤンに曰く、「ならぬ堪忍するか堪忍」と。偉大なる家康の遺訓の中にある。「人の人生は重き肩と莫大な盡き道を行くかとし。急ぐべからず。堪忍は無事長久の基……己れを責めよ人を責むな」。彼はこの言ひとて自己の生活にあたりを実証した。ある狂歌師の口上句が妙である。信玄には「ゆきがれば移してまよふ部公トキギス」秀吉には「ゆきがればゆきまよふ部公」。家康には、「ゆきがればゆきまよふ部公」。>

<多くの少年は、父の家の敷居を越えて時世に之の名を残すにあらざれば、再びこれを足李マロードといひに替つた。恥じませられ、もしくは名を得るために、武士の少年は、いかなる次第も必ず身体的精神性を武器に付す。少年の時に得た名譽は命よりともに成長することを、彼らは知つていた。>

卓越した安全性
トゲなし玉掛ワイヤー
日興製綱株式会社
Wスリング

<武士道が如何なる高木の非鬨争的非抵抗的なる柔軟にまで、強く達したるかは、その信奉者の言によつて知られる。その一例を西郷南浦が引用。「道は天地自然のものにて、人はこれを守らなければ、天を敵するを目的とする。天は人を我を同一に愛したる故、我を愛するじをもつて人を愛するなり。人を相手にせず、天を相手にせず。天を相手にせず己を尊んで人を咎めず、物を足らざるを尋ねべし」と。以上の一文は、たゞに毫葉に述べられたに止まる、現実の行為に具体化せられた。>

日興製綱株式会社の綱は、本省は金剛索引で、大阪は岸和田のワイヤードの老舗X-HI-SUN "Wスリング" は実は、当社の総合資料の1995年の第3版、つまり15年前から載つています。

このたび改訂があり、2010年の第7版用に慎重吟味し資料を改訂。(別添資料)
 この時期にこそ、雨吟味したて値打削りと思いつて提案の次第。武蔵故白